



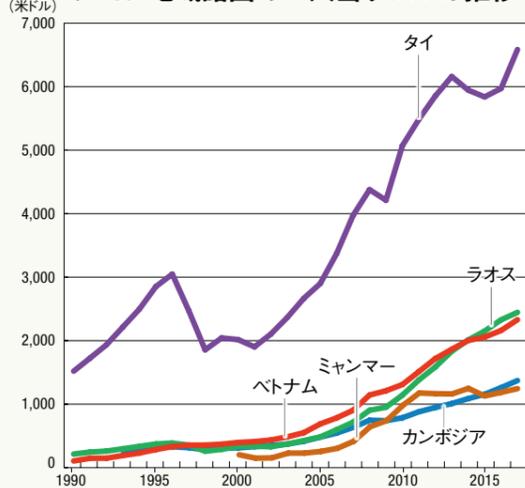
上：南部経済回廊上のカンボジアに架かるネアックルン橋（つばさ橋）。東はベトナム・ホーチミンへ、西はカンボジア・プノンベンを経て、タイ・バンコクへとつながる。
下：東西経済回路上に建設された第2メコン国際橋。タイとラオスを結び友好橋と呼ばれる。（上下写真提供：久野真一）

現在のメコン地域の経済回廊地図



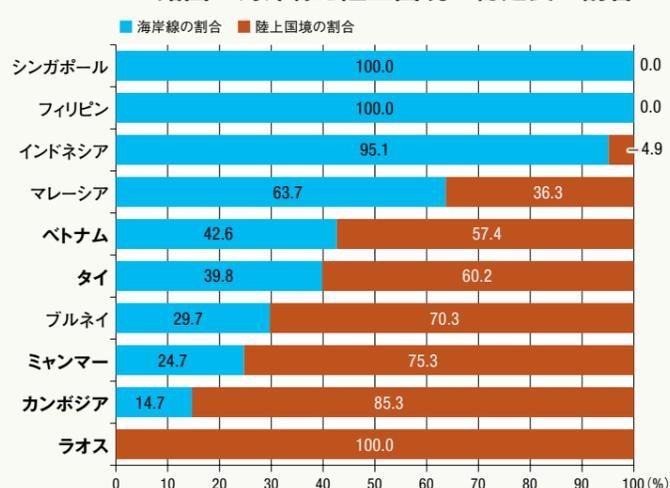
出所：ADBのウェブサイトをもとに作成

メコン地域諸国の1人当たりGDPの推移



出所：World Development Indicatorをもとに作成。

ASEAN諸国の海岸線と陸上国境の総延長の割合



陸上国境の長いメコン地域諸国にとって、陸上交通での連結性は重要だ。

出所：CIAのウェブサイト（2012年4月15日閲覧）をもとに作成。

特別授業

メコン地域における経済回廊

戦場から市場へと変貌を遂げたメコン地域。紛争が終わり、物や人が行き交う経済の構想が始まって約30年がたち、安定した未来に向けた歩みが加速している。経済成長の一端を担う経済回廊が果たした役割を紹介する。

貧困削減が進むカンボジア・プノンペン



子どもたちを遊ばせる様子（2013年11月6日）。



物乞いをする子どもたち（2004年9月2日）。

インフラ整備がもたらす経済成長

1990年代初めまで続いた紛争でインドシナをはじめメコン地域の国土は荒れ、経済発展は他のASEAN諸国と比べて後れをとっていた。各国の内戦と冷戦の終結、そして1991年のパリ和平協定を機に、メコン地域は経済成長に向けて歩み始める。旧社会主義国も国境を開き、戦場から市場へ

と、メコンの諸都市は大きな変貌を遂げました」と、JETROアジア経済研究所の石田正美さんは語る。

戦争や内戦によって寸断された道路インフラの復旧が急務だった。「国境を隔てた国がたがいに協力すれば地域は安定する」——アジア開発銀行（ADB）の経済回廊構想には、そうした思いがあったと石田さんは言う。アジア通貨危機の中で起死回生のコンセプトとして誕生した経済回廊は、現在では2車線舗装化が完了し、区間によって4車線化や高速道路化が進む。海岸線が短く、海上貿易の可能性に制約を受けるカンボジアやミャンマー、さらに内陸国ラオスなど陸上国境の長い国にとって、越境輸送インフラとしての経済回廊は貿易の可能性を大きく広げた。経済回廊の各区間の道路整備とメコン川の架橋によって、徐々にではあるが国境貿易は増える傾向にある。

「経済回廊によって、日本企業には、タイ・プラスワンが始まりました。工場団地や経済特区（SEZ）が建設されたことで投資環境が整い、かつタイから陸路でつながるメコン地域の国に工場を移転させる動きがあります。タイの経済に、周辺国が組み込まれたサプライチェーンができて上がりました」。この結果、工程間分業がタイを中心に国境を越えて行われているという。原材料の

インフラを生かすシステムの整備

道路の舗装、拡幅、カーブの直線化、架橋、高速道路化が行われることで輸送時間が短縮された。そうした越境輸送インフラが整い始めた今、次に短縮化が求められるのが通関の時間やコストだ。国境を越えるには、税関、出入国、検疫と三つの手続きが必要で、効率化を行う取り組みも進んでいる（14ページ参照）。また道路上では、輸出国側と輸入国側で検査を2回受ける。こうした検査を1回で済ませるシングル・ストップ構想が推進されようとしている。「現在、ラオスとベトナムの間でシングル・ストップ検査の取り組みが試験的に始まっています。ラオス人出入国官とベトナム人出入国官が席を並べ、パスポートを横に受け渡すことで1回の検査で対応でき、効率化を図っています」と石田さんは、越境輸送の円滑化のためのソフト・インフラの重要性を説く。

経済回廊がもたらした効果には、人の移動もある。第2メコン国際橋が2006年に開通して数年間は、タイから東西経済回廊を利用したベトナム観光がブームになり、フエや

ダナン、ホイアンといった観光地へ多くの人が訪れた。また、ベトナムの省がラオスの省に奨学金を出して、ベトナムの大学で学ぶラオスの若者を募集。学生たちは飛行機を使わずバスで両国を行き来する。

メコン地域開発に大きな役割を果たす経済回廊は、紛争の火種を断ち、安定したメコン地域諸国の未来につなげている。

JETROアジア経済研究所
開発研究センター、上席主任調査研究員
石田正美（いしだ・まさみ）さん

1960年生まれ。成蹊大学法学部卒業。インドネシア大学大学院経済学研究科博士課程修了（経済学博士）。外務省専門調査員として在マレーシア日本大使館勤務後、アジア経済研究所に勤務。在ジャカルタ海外派遣員、バンコク事務所などを経て2019年から現職。近著に『タイ・プラスワンの企業戦略』（共編、勁草書房）。



写真・データ提供：石田正美